

国文学志望の皆さんへ——読書の手引き——

国文学研究室編

2020.5.1.

今これを読んでいる皆さんは、国文学専修への進学について考えているところかと思います。

「国文に進学して研究生生活を始めるとしたら、どんな準備をしておけばよいだろう？」

「どんな本を読んでおけばよいだろう？」

「作品の原典から研究書まで、たくさん本があるけれど、いったいどれを選べばよいのだろう？」

こうした疑問が、遠からず皆さんの脳裏に浮かんでくることでしょう。

そんな皆さんに、読書の道しるべとなるものを届けたい。そう考えて編んだのが、この「国文学志望の皆さんへ——読書の手引き——」です。

この手引きは5つのパートで構成されています。

1 原典を読む

1.1. はじめの一步——国文に進学するなら読んでほしい名作

1.2. さらに深く——文学の多様な広がりを見せてくれる名作

2 研究書を読む

2.1. はじめの一步——入門に最適の名著

2.2. さらに深く——研究の面白さを教えてくれる名著

3 近現代文学の森

4 外国文学の小径

5 国文学研究室的教員の著作

どんな独創的な研究も、それを生み出す土壌がなくては育ちません。研究の土壌は、多くの原典を読んで考え、さまざまな研究書から広く学ぶことで培われます。「1 原典を読む」「2 研究書を読む」では、上代文学・平安文学・中世文学・近世文学・近現代文学の順に、各時代を専門とする教員が精選した本を推薦コメントつきで紹介します。

近現代文学には数多くの名作があります。「3 近現代文学の森」には、それらの名作をまとめてあります。推薦コメントを参考にしながら読んでください。

「4 外国文学の小径」は、国文学を研究する学生さんにも外国の古典や名作を読んでもらいたいという趣旨で設けました。どの国の文学であるかを問わず、興味のある作品にはどんどん手をのばしてもらいたいと思います。

また、時々「国文の先生たちはどんな本を書いているのか？」という質問も受けます。気になる方は「5 国文学研究室的教員の著作」を参照してください。

まず読んでみる。読んで考えてみる。それが文学研究の基本姿勢です。私たち教員は、読書によって培われた土壌から、皆さん自身の研究がはつらつと芽生えてくる日を待ち望んでいます。

1 原典を読む

1.1. はじめの一步——国文に進学するなら読んでほしい名作

○上代文学 ※推薦コメント（鉄野昌弘）

『万葉集』（講談社文庫、中西進校注・訳）

『古事記』（新編日本古典文学全集、神野志孝光・山口佳紀校注）

『日本書紀』（岩波文庫、坂本太郎ほか）

『風土記』上・下（角川ソフィア文庫、中村啓信監修）

※ 『万葉集』『古事記』ともに多くのテキストがありますが、もともと書かれていたのは漢字だけの文だったはずで、その面目を保つものが良いと思います。風土記は地図と照らし合わせながら読むと面白いですよ。

○平安文学 ※推薦コメント（高木和子）

『古今和歌集』（角川ソフィア文庫、高田祐彦訳注）

『伊勢物語』（角川ソフィア文庫、石田穰二訳注）

『落窪物語 上・下』（角川ソフィア文庫、室城秀之訳注）

『源氏物語 1～10』（角川ソフィア文庫、玉上琢彌訳注）

『大鏡』（角川ソフィア文庫、佐藤謙三校注）

※ まずは、古典の本文を読むことに挑戦してみましょう。『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』は、日本の古典文学の要です。後代まで広く読み継がれ、和歌や物語の規範として、また絵画や工芸や芸能等の素材として受容されました。この機会にぜひ、日本文化の根幹に触れてみてください。『落窪物語』は継子物語、『大鏡』は歴史物語で、どちらも大変楽しく読めますのでご一読ください。

○中世文学 ※推薦コメント（木下華子）

『新古今和歌集』上下（角川文庫、久保田淳訳注）

『方丈記』（ちくま学芸文庫、浅見和彦校訂・訳）

『宇治拾遺物語 古本説話集』（新日本古典文学大系、三木紀人ほか校注、岩波書店）

『平家物語』（一）～（四）（岩波文庫、梶原正昭・山下宏明校注）

『徒然草』（ちくま学芸文庫、島内裕子校訂・訳）

※ 中世は、多くの動乱と社会変化に直面した変革の時代です。文学においても、和歌・歌謡・連歌・説話・軍記・紀行・物語・芸能（能や狂言）など、多くのジャンルと作品が生み出されました。ここには、中世文学を代表するいくつかの作品を挙げています。危機に向き合い、変化を受けとめ、境界を乗り越える人々の言葉や思索を、ぜひ味わってみてください。

○近世文学 ※推薦コメント（佐藤至子）

西鶴『好色一代男』（新編日本古典文学全集『井原西鶴集』1、暉峻康隆校注・訳）

近松門左衛門『曾根崎心中』（新編日本古典文学全集『近松門左衛門集』2、山根為雄校注・訳）

上田秋成『雨月物語』（岩波文庫、長島弘明校注）

芭蕉・去来・凡兆ほか『猿蓑』（新日本古典文学大系『芭蕉七部集』、白石悌三校注）

柳亭種彦『修紫田舎源氏』（新日本古典文学大系『修紫田舎源氏』、鈴木重三校注）

※ 『好色一代男』は生涯を色恋に傾けた男の物語。古典をふまえつつ近世の町人の享楽生活が描かれています。『曾根崎心中』は図らずも追い詰められてゆく人間たちのドラマ。『雨月物語』は“人間とは何か”を考えさせる短編集です。個人的には「蛇性の姪」「青頭巾」がお勧めです。『猿蓑』は「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」（芭蕉）を巻頭に置く句集。名句多し。『修紫田舎源氏』は『源氏物語』を中世の武家の物語に翻案した傑作です。華やかな挿絵にも注目してください。

○近現代文学 ✽推薦コメント（安藤宏）

作家と作品は「3 近現代文学の森」を参照してください。

✽ 近代文学の基本的な作品リストを「3 近現代文学の森」にあげておきました。この中でまず最初にもってほしい問題意識は「文体」の変化です。リストの中から森鷗外の初期作品、幸田露伴、「五重塔」、樋口一葉の「にぎりえ」、北村透谷の評論などに触れてみた上で、明治の前半期、いかにさまざまな文体が併走していたかを実感してみてください。詩歌に関しては、文語定型詩の典型である島崎藤村の『若菜集』と、口語自由詩である萩原朔太郎の『月に吠える』を読み比べてみるとよいでしょう。

次に小説の視点について、全能的視点の典型である夏目漱石の『明暗』、有島武郎の『或る女』と、一人称小説（一元的視点）の典型である志賀直哉の作品を読み比べ、同じジャンルでありながらも表現領域が違ってくるものか、考えてみるとよいと思います。

1.2. さらに深く——文学の多様な広がりを見せてくれる名作

○上代文学 ✽推薦コメント（鉄野昌弘）

『日本霊異記』（ちくま文庫、多田一臣校注）

『懷風藻』（講談社学術文庫、江口孝夫校注）

✽ 『日本霊異記』（日本国現報善悪霊異記）は、奈良時代から平安初期にかけての民衆の生活を窺うことのできる面白いテキストです。『懷風藻』は奈良時代の漢詩集。当時の人たちが中国の文化をどう摂取したかをよく語っています。

○平安文学 ✽推薦コメント（高木和子）

『蜻蛉日記 I・II』（角川ソフィア文庫、河村裕子校注）

『うつほ物語 1～3』（小学館新編日本古典文学全集、中野幸一校注）

『和泉式部日記』（角川ソフィア文庫、近藤みゆき校注）

『和漢朗詠集』（角川ソフィア文庫、三木雅博校注）

『狭衣物語 上・下』（新潮日本古典集成、鈴木一雄校注）

✽ 『源氏物語』より前に成立した『うつほ物語』、後に成立した『狭衣物語』は、昨今注目の研究分野です。『蜻蛉日記』『和泉式部日記』は女性による和歌の贈答を通じた記録ですが、実録とは言い難い虚構性を備えています。『和漢朗詠集』は同じ題のもとに漢詩と和歌を並べた詩集です。いずれも読破するにはやや根気がいるかもしれませんが、ぜひ挑戦してみてください。

○中世文学 ✽推薦コメント（木下華子）

『今昔物語集』1～5（新日本古典文学大系『今昔物語集』、小峯和明・池上洵一ほか校注）

『西行 魂の旅路』（角川文庫、西澤美仁編）

『とはずがたり』（新日本古典文学大系『とはずがたり たまきはる』、三角洋一校注）

『太平記』1～6（岩波文庫、兵藤裕己校注）

『御伽草子』（新編日本古典文学全集『室町物語草子集』、大島建彦・渡浩一校注）

✽ 『今昔物語集』は1000を超える説話を収めた文学史上最大の説話集です。全てを読み通すのは大変だと思ふ場合、ぜひ、本朝世俗部から読んでみて下さい。近代において芥川龍之介が再発見した説話の面白さ・魅力を体験することができます。西行は、平安時代末期、貴族から武士の世へと時代が大きく転換した時期の歌人です。生命力と行動力に溢れる和歌をぜひ味わってほしいと思い

ます。その西行にあこがれて、出家後に全国を行脚した鎌倉時代後期の宮廷女房が後深草院二条です。後深草院の寵愛を受けた前半生から出家後の後半生まで、彼女が自身の人生をどのように見つめたか、その視線と自画像のあり方を『とはずがたり』にうかがうことができます。鎌倉幕府滅亡から南北朝の動乱の時代を描く『太平記』は、『平家物語』とともに軍記物語の双璧をなす作品です。泥臭く生き延びて戦略的に時代を切り拓く人々の骨太いエネルギーを体感して下さい。室町物語とも呼ばれる『御伽草子』は、短編の絵入り物語の総称です。数多くの作品がありますが、いくつかのものを読めば、それらが昔話・童話・絵本などを通して現代の私たちに受け継がれていることがわかります。室町期と今の差異、変わるものと変わらないものに目を向けてみるのも面白いのではないのでしょうか。

○近世文学 ✽推薦コメント（佐藤至子）

浅井了意『伽婢子』（『伽婢子』新日本古典文学大系、松田修・渡辺守邦・花田富二夫校注）

二世竹田出雲ほか『仮名手本忠臣蔵』（『浄瑠璃集』新編日本古典文学全集、長友千代治校注・訳）

山東京伝『御存商売物』（『黄表紙 洒落本集』日本古典文学大系、水野稔校注）

曲亭馬琴『南総里見八犬伝』（岩波文庫、小池藤五郎校訂）

三遊亭円朝『真景累が淵』（『円朝全集』5、延広真治校注）

- ✽ 『伽婢子』は中国小説を翻案した奇談集。『仮名手本忠臣蔵』は赤穂浪士が吉良上野介に復讐した“赤穂事件”に取材した浄瑠璃です。歌舞伎化もなされ、現代でもしばしば上演されています。『御存商売物』は江戸の本や浮世絵が人間の姿で登場します。江戸戯作の面白さを知ることができます。『南総里見八犬伝』は不思議な玉を持つ犬士たちが登場する壮大な歴史伝奇小説です。『真景累が淵』は長編の人情噺。古くからある累伝説を下敷きにした怪談です。

○近現代文学 ✽推薦コメント（安藤宏）

作家と作品は「3 近現代文学の森」を参照してください。

- ✽ 近代文学は、膨大な分量があるので、理屈抜きにただひたすら読んで下さい。

「近現代文学の森」にあげたのは、とりあえず思いついた代表作です。この中でこれまで自分が読んだことのあるものがどのくらいあるか、チェックリストに使ってみてもよいですし、これから名作に触れるための指針にして頂いても結構です。

2 研究書

2.1. はじめの一步——入門に最適の名著

○古典全般 ✽推薦コメント（鉄野昌弘）

秋山虔『古典をどう読むか—日本を学ぶための『名著』12章』（笠間書院、2005年）

- ✽ 源氏物語研究の泰斗による、古典研究の名著の紹介と批評。

鈴木日出男・小島孝之・多田一臣・長島弘明編『古典入門』（筑摩書房、1998年）

- ✽ 私たちより一世代前の教員が総力を結集して作った入門書。

久保田淳ほか『人生をひもとく 日本の古典』6冊（岩波書店、2013年）

- ✽ 古典の名句をめぐる6人の研究者たちのエッセイ。

鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史』4冊（三弥井書店、2011年）

- ✽ 鳥獣虫魚それぞれをテーマとする文学を読み解く平易な論文集。『海の文学史』などのシリーズもあります。

鈴木健一『古典注釈入門－歴史と技法』（岩波現代全書、2014 年）

✽ 古典研究に欠かせない注釈の意義と読み方を丁寧に解説する。

○上代文学 ✽推薦コメント（鉄野昌弘）

小島憲之・木下正俊・東野治之校訂・訳『日本の古典をよむ 万葉集』（小学館、2008 年）

✽ 『日本の古典をよむ』シリーズは、新編古典文学全集のダイジェスト。平易な解説がついています。

上野誠『万葉びとの生活空間』（はなわ新書、2000 年）

✽ 『万葉集』の歌と、現実世界との関係の分かる好著。

こうの史代『ぼおるぺん古事記』（平凡社、2012-2013 年）

✽ 「この世界の片隅に」の作者による古事記神話の漫画化。原文をすべてボールペンで書き写した上での忠実な絵画化。

○平安文学 ✽推薦コメント（高木和子）

概説的入門及び、斬新な発想で話題となった本です。研究にはしなやかな思考力が必須です。

秋山虔『源氏物語』（岩波新書、1968 年）

✽ 入門的概説書だが、随所に含意される研究史的情况を理解するには相応の学力が必要。

鈴木日出男『古代和歌の世界』（ちくま新書、1999 年）

✽ この一冊で古代和歌がわかると言っても過言ではない、読みやすい入門の一冊。

高田祐彦・土方洋一『仲間と読む 源氏物語ゼミナール』（青簡舎、2008 年）

✽ 源氏研究の基本的手法が紹介されており、初学者に有益な一冊。

原岡文子『『源氏物語』に仕掛けられた謎』（角川書店、2008 年）

✽ 若紫巻の徹底的な解析から、源氏物語全編の内実と多様な研究手法を伝える一冊。

藤本勝義『源氏物語の〈物の怪〉』（笠間書院、1994 年）

✽ 平安時代の物の怪について、古記録の調査から理解を促した記念碑的一冊。

工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』（風間書房、1994 年）

✽ 平安時代は一夫多妻という常識を覆して一夫一妻多妾と主張、一世を風靡した一冊。

三谷邦明・三田村雅子『源氏物語絵巻の謎を読み解く』（角川選書、1998 年）

✽ 後代の為政者による源氏物語受容に潜むイデオロギーを暴く。源氏の享受史研究の草分け的一冊。

神田龍身『偽装の言説 平安朝のエクリチュール』（森話社、1999 年）

✽ 物語テキストの基盤に口承文芸があるとされてきた通説を転覆、偽装の言説と評した痛快の一冊。

片桐洋一『平安文学の本文は動く』（和泉書院、2015 年）

✽ 作品解釈のできる本文研究の大家が、本文の生成について論じた一冊。

○中世文学 ✽推薦コメント（木下華子）

久保田淳『旅と草庵の歌人 西行の世界』（日本放送出版協会、1988 年）

✽ 中世和歌のみならず日本文学史の巨人とも言える西行の生涯について、作品に対する真摯な読みと時代考証に基づきながら、その輪郭を描く名著。

小林幸夫・品田悦一・鈴木健一・高田祐彦・錦仁・渡部泰明『【うた】をよむ——三十一字の詩学』（三省堂、1997 年）

✽ 6 人の研究者による〈うた〉についての入門的研究書。日本文学史を貫いて生き続ける〈うた〉について、様々な時代・視点から魅力を繙き、31 字から成る豊かな世界への手引きをしてくれる。

西郷信綱『梁塵秘抄』（ちくま学芸文庫、2004 年）

- ※ 中世初期のポップソング「今様」、その今様に熱中した後白河院が編んだ『梁塵秘抄』から十数首の歌詞を選んで読み解く。和歌とは異なる今様のエネルギーを味わえる。

三木紀人『鴨長明』（講談社学術文庫、1995 年）

- ※ 『方丈記』の作者鴨長明の生涯と作品を、丁寧にかつ魅力的に読み解き、輪郭を描き出す名著。

石母田正『平家物語』（岩波新書、1979 年）

- ※ 歴史学者である著者による『平家物語』論。『平家物語』のみならず、中世を捉えた一書としても古典的な名著である。

兵藤裕己『平家物語の読み方』（ちくま学芸文庫、2011 年）

- ※ なぜ『平家物語』は時代を超えて愛されるのか。その魅力を「声」すなわち語りの共同性から解き明かす、斬新で魅力的な『平家物語』論。

島内裕子『兼好 露もわが身も置きどころなし』（ミネルヴァ日本評伝選、2005 年）

- ※ 『徒然草』の作者兼好の生涯と作品について、青年期から老年期への変貌を捉えつつ読み解く。

小西甚一『宗祇』（日本詩人選、ちくま書房、1971 年）

- ※ 室町時代の連歌師宗祇の評伝であると同時に、中世を代表する文芸・連歌とは何かを緬く。

天野文雄『現代能楽講義』（大阪大学出版会、2004 年）

- ※ 能と狂言についての十講からなる入門書。能と狂言の歴史をたどり、現代を生きる芸能・演劇としての能狂言の魅力を伝える。能をなんとなく堅苦しい古典芸能と思う人にこそ読んでほしい一書。

○近世文学 ※推薦コメント（佐藤至子）

長島弘明編『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学事典』（文学通信、2019 年）

- ※ 幅広いジャンルから面白い作品を選びすぎり、“読む事典”の形でわかりやすく解説した書。

中野三敏『十八世紀の江戸文芸一雅と俗の成熟一』（岩波書店、1999 年）

- ※ 元禄文化と化政文化に挟まれた十八世紀こそが最も近世らしい時代だったと説き、新しい文学史観を提示した書。

木村八重子『草双紙の世界 江戸の出版文化』（ぺりかん社、2009 年）

- ※ 江戸から明治まで流行した絵入り小説について、豊富な図版とともに解説した書。

服部幸雄『江戸歌舞伎』（同時代ライブラリー、1993 年）

- ※ 江戸の歌舞伎を知るには最適の一冊。歌舞伎の基本的な構造と、役者・作者・劇場などのあり方がよくわかる。

延広真治・山本進・川添裕『落語の世界 1 落語の愉しみ』（岩波書店、2003 年）

- ※ 落語に関する論文、落語家へのインタビュー、落語研究者と映画監督の対談など、落語と落語研究の基本がわかる一冊。

○近現代文学 ※推薦コメント（安藤宏）

中村光夫『日本の近代小説』（岩波新書、1954 年）

三好行雄『日本の近代文学』（塙書房、1972 年）

日本近代文学会編『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』（ひつじ書房、2016 年）

鈴木貞美『日本文学の論じ方一体系的研究法』（世界思想社、2014 年）

- ※ 中村光夫の本はさすがに記述が古いですが、文学史の面白さを知ってもらえる意味があるでしょう。『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』は、さまざまなアプローチの方法を、学会として編輯、発信したものです。

2.2. さらに深く——研究の面白さを教えてくれる名著

○上代文学 ✽推薦コメント（鉄野昌弘）

西郷信綱『古代人と夢』（平凡社選書、1972年、復刊：平凡社ライブラリー、1993年）

✽ 我々とは異なる古代人の心性を文学作品から分析する古典的名著。

益田勝実『火山列島の思想』（ちくま学芸文庫『益田勝実の仕事2』所収、2006年）

✽ 古代文学に大きな構想を描き出す名著。

吉田孝『日本の誕生』（岩波新書、1997年）

✽ 古代文学の生まれる契機となった古代国家「日本」の成立を古代史研究から解説する。

品田悦一『万葉集の発明』（新曜社、2001年）

✽ 「天皇から庶民まで」という万葉集のキャッチフレーズがいかに出来上がったかを実証する。

稲岡耕二『山上憶良』（吉川弘文館人物叢書、2010年）

✽ 大伴旅人との交流を通して、大宰府における憶良の文学がいかに形成されたかを描く。万葉仮名の使い方に注目する点に独自性を持つ。

神野志隆光『万葉集をどう読むか 歌の「発見」と漢字世界』（東大出版会、2013年）

✽ 『万葉集』を歴史テキストとして読む視点を提唱した刺激的な一書。

○平安文学 ✽推薦コメント（高木和子）

やや本格的で難易度は高めですが、いずれも研究に必読の書です。背伸びして挑戦してください。

玉上琢彌『源氏物語研究 源氏物語評釈別巻一』（角川書店、1966年）

✽ 物語音読論、語り手女房論など、戦後の源氏研究の基盤を築いた一冊。

秋山虔『源氏物語の世界 その方法と達成』（東京大学出版会、1964年）

✽ 秋山源氏の重厚にして典雅な一冊。著者のその後の多くの著作も必読。

藤井貞和『源氏物語の始原と現在』（三一書房、1972年、後に数回別の書店から再刊）

✽ 一度ははまる一冊。物語の発生から源氏物語を位置づけた、独自の藤井ワールド。

高橋亨『源氏物語の対位法』（東京大学出版会、1982年）

✽ これも源氏研究に必読の書。構造・表現・引用等の研究手法と優れた論理性が際立つ。

鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会、1990年）

✽ 古代和歌研究の重厚な一冊。心物対応構造で万葉から平安和歌までをさばいて圧巻。

藤原克己『菅原道真と平安朝漢文学』（東京大学出版会、2001年）

✽ 平安漢文学の大家による重厚な一冊。学識の深さと詩心に溢れる魅力の書。

増田繁夫『源氏物語と貴族社会』（吉川弘文館、2002年）

✽ 源氏研究に歴史学の成果を導入した先駆的成果。幅広く学識ある著者の、他の著作も必見。

片桐洋一『古今和歌集全評釈 上中下』（講談社、1998年）

✽ 重厚な注釈。和歌研究の大家ならではのバランスの取れた豊かな解釈が読みどころ。

大津透・池田直隆編『藤原道長事典』（思文閣出版、2017年）

✽ 平安朝の歴史的情况への理解を促す一冊。興味のある項目を拾い読みするとよい。

○中世文学 ✽推薦コメント（木下華子）

久保田淳『久保田淳著作選集』1～3巻（岩波書店、2004年）

✽ 中世文学研究の泰斗である著者の論文を精選し、全3巻にまとめた論集。第1巻「西行」、第2巻

「定家」、第3巻「中世の文化」から成る。私たちは歴史的な言葉・作品・作者とどのように向き合うべきか、それらはいかに文学史へと拓いてゆくのか、その姿勢や道筋を学ぶことができる。どこからでもよい、まずは一篇を選んで読んでほしい。

目崎徳衛『西行の思想史的研究』（吉川弘文館、1978年）

✽ 様々な「像」を持つ西行の伝記を、歴史学的実証主義によって修正し、その全貌を発掘・解明した古典的名著。私たちの抱く作品鑑賞からのイメージが、史料の集積と読解によってどのように変わるのかを体験してほしい。

益田勝実『説話文学と絵巻』（ちくま学芸文庫『益田勝実の仕事1』所収、2006年。初版1960年）

✽ 説話を、人間および人間性の問題をつかもうとする文学だと捉え、日本文学研究に一つの画期をもたらした古典的名著。

池上洵一『『今昔物語集』の世界—中世のあけぼの—』（筑摩書房、1983年。池上洵一著作集第3巻）

✽ 文学史上最大の説話集『今昔物語集』の輪郭と内実を、各説話の面白さを丹念に繙きながら提示する。説話文学研究の醍醐味を味わうことができる名著。

小峯和明『説話の森』（岩波現代文庫、2001年。初版1991年）

✽ 説話とは何か、どう読み解くのか、そこからもたらされる面白さは何かを、いくつかの説話を取り上げて解き明かす。説話文学研究への手引きとしても秀逸。

五来重『高野聖』（角川ソフィア文庫、2011年。『増補 高野聖』1975年を文庫化）

✽ 高野山を拠点に全国を遊行する高野聖の活動を、成立・発展・消滅の歴史とともに解き明かす。日本宗教史に一石を投じた古典的名著。泉鏡花『高野聖』における聖とのイメージの相違を楽しみたい。

松岡心平『宴の身体 バサラから世阿弥へ』（岩波現代文庫、2004年。初版1991年）

✽ 中世は芸能の時代でもあるが、芸能は演じる者の身体を抜きに語ることはできない。そのような中世の身体の有り様とそれをめぐる美意識の様相を、世阿弥を軸として解き明かす刺激的な名著。

佐竹昭広『下剋上の文学』（ちくま学芸文庫、1993年。初版1967年）

✽ 御伽草子（特に「物くさ太郎」）と狂言を中心とした論文集。中世後期に溢れ出すふてぶてしく反抗的な力、笑いの力、それらの激しいエネルギーが現実を変革する様を描き出す。

徳田和夫『絵語りと物語り』（平凡社、1993年）

✽ 中世文学と絵画は切り離すことができない。人々の信仰を集めた聖地を描く絵画（参詣曼荼羅や説話画など）を読み解き、歴史的絵画を私たちはどう読むべきか教えてくれる一書。

○近世文学 ✽推薦コメント（佐藤至子）

尾形仿『座の文学』（講談社学術文庫、1997年）

✽ 文芸共同体としての“座”という観点から近世の俳諧を論じた書。

中村幸彦『戯作論』（『中村幸彦著述集』8、中央公論社、1982年）

✽ 戯作とは何かという大きな問題を多角的な観点から論じた書。

鈴木重三『改訂増補 絵本と浮世絵 江戸出版文化の考察』（ぺりかん社、2017年）

✽ 江戸文学と浮世絵研究の第一人者による大著。絵を読み解くことの重要性、作品研究における書誌学的アプローチの有用性がわかる。

鈴木圭一『中本研究 滑稽本と人情本を捉える』（笠間書院、2017年）

✽ 資料を集めて分析することの楽しさが伝わってくる一冊。

延広真治『江戸落語』（講談社学術文庫、2011年）

✽ 膨大な資料を読み解き、近世における落語の形成過程を論じる。落語研究の必携書。

中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』（岩波書店、1995 年）

✽ 近世に出版された本（板本）から何を読み取るか。板本の扱い方と見方の基礎がわかる一冊。

○近現代文学 ✽推薦コメント（安藤宏）

中村光夫『風俗小説論』（河出書房、1950 年）

三好行雄『作品論の試み』（至文堂、1972 年）

尾形侑『森鷗外の歴史小説 史料と方法』（筑摩書房、1979 年）

前田愛『都市空間のなかの文学』（筑摩書房、1982 年）

小森陽一『文体としての物語』（筑摩書房、1998 年）

山本芳明『文学者はつくられる』（ひつじ書房、2000 年）

宇佐美毅『小説表現としての近代』（おうふう、2004 年）

日比嘉高『〈自己表象〉の文学史』（翰林書房、2005 年）

三好行雄『日本文学の近代と反近代』（東京大学出版会、新装版 2015 年）

✽ 作品論のひな形になるのが三好氏の『作品論の試み』。文学史を論じる面白さは中村光夫氏、三好行雄氏の『日本文学の近代と反近代』で学びたい。ナラトロジーなど表現論的発想は小森氏の本が有益で、この発想で明治文学史を論じたのが宇佐美氏の著。尾形氏の著は、小説の典拠をどう扱うか、という点でひな形となる良書。前田氏の著は文化記号論的なアプローチとして面白い。山本氏の著は社会学的な観点から文学を論じたもので、読者論的な発想で文学史を論じた日比氏の著も参考になる。

3 近現代文学の森

近代文学の主立った名作をあげておきます。ほとんどは文庫本で読めるので、ひたすら分量をこなして頂きたいと思います。

二葉亭四迷	「浮雲」「平凡」
森鷗外	「舞姫」「半日」「キタ・セクスアリス」「雁」「青年」「妄想」 「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「山椒太夫」「高瀬舟」
尾崎紅葉	「金色夜叉」
幸田露伴	「風流仏」「一口剣」「五重塔」
北村透谷	「厭世詩家と女性」「人生に相渉るとは何の謂ひぞ」「内部生命論」
樋口一葉	「にぎりえ」「たけくらべ」「十三夜」
泉鏡花	「外科室」「高野聖」「歌行燈」「天守物語」「夜叉ケ池」
正岡子規	「歌よみに与ふる書」「墨汁一滴」「病牀六尺」「仰臥漫録」
与謝野晶子	「みだれ髪」
国木田独步	「武蔵野」「忘れ得ぬ人々」「春の鳥」「牛肉と馬鈴薯」「竹の木戸」
田山花袋	「蒲団」「東京の三十年」
島崎藤村	「若菜集」「破戒」「家」「春」「新生」「夜明け前」
徳田秋声	「黴」「あらくれ」「仮装人物」
正宗白鳥	「何処へ」「文壇人物評論」
伊藤左千夫	「左千夫歌集」「野菊の墓」
高浜虚子	「虚子句集」「斑鳩物語」
永井荷風	「地獄の花」「ふらんす物語」「すみだ川」「腕くらべ」「瀬東綺譚」

谷崎潤一郎	「刺青」「痴人の愛」「蓼喰ふ虫」「春琴抄」「細雪」「瘋癲老人日記」「陰影礼讃」
北原白秋	「邪宗門」「思ひ出」「桐の花」
高村光太郎	「智恵子抄」
夏目漱石	「我輩は猫である」「坊つちやん」「草枕」「三四郎」「それから」 「門」「行人」「道草」「明暗」「現代日本の開化」「私の個人主義」
石川啄木	「一握の砂」「悲しき玩具」「呼子と口笛」
有島武郎	「カインの末裔」「或る女」「惜しみなく愛は奪ふ」
武者小路実篤	「お目出たき人」「友情」「真理先生」
志賀直哉	「網走まで」「大津順吉」「和解」「城崎にて」「清兵衛と瓢箪」「暗夜行路」
斎藤茂吉	「赤光」
柳田国男	「遠野物語」
折口信夫	「死者の書」「古代感愛集」
葛西善蔵	「子をつれて」「湖畔手記」「酔狂者の独白」
広津和郎	「神経病時代」「風雨強かるべし」
芥川龍之介	「羅生門」「鼻」「戯作三昧」「地獄変」「奉教人の死」「舞踏会」「秋」 「一塊の土」「藪の中」「玄鶴山房」「蜃気楼」「歯車」「河童」 「或る阿呆の一生」「侏儒の言葉」
野上弥生子	「真知子」
佐藤春夫	「殉情詩集」「田園の憂鬱」
室生犀星	「抒情小曲集」「性に眼覚める頃」「かげろふの日記遺文」
萩原朔太郎	「月に吠える」「青猫」「氷島」
宮沢賢治	「春と修羅」「注文の多い料理店」「銀河鉄道の夜」
江戸川乱歩	「押絵と旅する男」「陰獣」
中野重治	「村の家」「歌のわかれ」「むらぎも」
小林多喜二	「蟹工船」「一九二八年三月十五日」
宮本百合子	「伸子」「播州平野」
横光利一	「日輪」「蠅」「機械」「上海」「紋章」「旅愁」
川端康成	「伊豆の踊子」「雪国」「名人」「千羽鶴」「山の音」
梶井基次郎	「檸檬」「冬の蠅」「闇の絵巻」「のんきな患者」
林芙美子	「放浪記」
堀辰雄	「麦藁帽子」「風立ちぬ」「菜穂子」「大和路・信濃路」
小林秀雄	「私小説論」「無常といふ事」「モオツァルト」「本居宣長」
三好達治	「測量船」
中原中也	「山羊の歌」「在りし日の歌」
立原道造	「萱草に寄す」「暁と夕の詩」
島木健作	「生活の探求」
久保栄	「火山灰地」
伊藤整	「雪明りの路」「得能五郎の生活と意見」「火の鳥」「小説の方法」
太宰治	「晩年」「富嶽百景」「皮膚と心」「駈込み訴へ」「新ハムレット」「津軽」 「お伽草紙」「ヴィヨンの妻」「斜陽」「人間失格」
石川淳	「普賢」「紫苑物語」「焼け跡のイエス」「狂風記」
坂口安吾	「風博士」「白痴」「夜長姫と耳男」「桜の森の満開の下」「紫大納言」

	「青鬼の禪を洗ふ女」「日本文化私観」「墮落論」
中島敦	「悟浄歎異」「山月記」「李陵」
横溝正史	「本陣殺人事件」
椎名麟三	「深夜の酒宴」
武田泰淳	「審判」「蝮のすゑ」「ひかりごけ」
埴谷雄高	「死霊」
井上靖	「猟銃」「氷壁」「天平の薨」
松本清張	「点と線」
福永武彦	「死の島」
島尾敏雄	「死の棘」
大岡昇平	「俘虜記」「野火」「武蔵野夫人」「レイテ戦記」
三島由紀夫	「仮面の告白」「金閣寺」「憂国」「豊饒の海」「近代能楽集」
安部公房	「壁」「砂の女」
深沢七郎	「檜山節考」
遠藤周作	「白い人」「海と毒薬」「沈黙」
安岡章太郎	「海辺の光景」
大江健三郎	「飼育」「死者の奢り」「芽むしり子撃ち」「個人的な体験」「同時代ゲーム」

4 外国文学の小径

ここにあげたものは誰もが知っている作品です。外国文学にふれることは、文学的な感性と、国文学を相対化する視線を養う一助となります。また、日本の古典文学や思想は、中国のそれに大きな影響を受けています。国文学を育てる土壌となった中国の古典文学にも、目を向けてほしいと思います。

※推薦コメント（鉄野昌弘・佐藤至子）

『論語』

※ 孔子と弟子たちの交情が麗しい。思うほど説教臭くありません。

『唐詩選』

※ 中国詩の精髓。対句の美しさに打たれます。

『十八史略』

※ 宋代までの中国歴史物語。有名なお話はみな入っています。

瞿佑『剪灯新話』

※ 日本の近世文学に多大な影響を与えた怪異小説集です。

シェークスピア『オセロ』『マクベス』

シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』

フローベール『ボヴァリー夫人』

トーマス・マン『トニオ・クレイガー』

トルストイ『アンナ・カレーニナ』

ドストエフスキー『罪と罰』

ヘミングウェイ『老人と海』

ヴァージニア・ウルフ『オーランド』

G・ガルシア＝マルケス『エレンディラ』

カルロス・フェンテス『アウラ・純な魂』

✿ 読みごたえがあり、作品世界に引き込まれる名作を選びました。

5 国文学研究室の教員の著作

○鉄野昌弘（上代文学）

『大伴家持「歌日誌」論考』（塙書房、2007 年）

『日本人のこころの言葉 大伴家持』（創元社、2013 年）

○高木和子（平安文学）

『源氏物語の思考』（風間書房、2002 年）

『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』（青簡舎、2008 年）

『男読み 源氏物語』（朝日新書、2008 年）

『コレクション日本歌人選 和泉式部』（笠間書院、2011 年）

『平安文学でわかる恋の法則』（ちくまプリマー新書、2011 年）

『源氏物語再考』（岩波書店、2017 年）

『物語二百番歌合 風葉和歌集』（明治書院、2019 年）＊共著、三角洋一氏と

『新たなる平安文学研究』（青簡舎、2019 年）＊編著、藤原克己氏監修

○渡部泰明（中世文学・和歌文学）

『中世和歌の生成』（若草書房、1999 年）

『和歌の力』（岩波書店、2005 年）＊編著

『和歌とは何か』（岩波新書、2009 年）

『中世和歌史論一様式と方法』（岩波書店、2017 年）

○木下華子（中世文学）

『鴨長明研究—表現の基層へ』（勉誠出版、2015 年）

○佐藤至子（近世文学）

『江戸の絵入小説—合巻の世界』（ぺりかん社、2001 年）

『山東京伝—滑稽洒落第一の作者』（ミネルヴァ書房、2009 年）

『妖術使いの物語』（国書刊行会、2009 年）

『江戸の出版統制—弾圧に翻弄された戯作者たち』（吉川弘文館、2017 年）

○安藤宏（近現代文学）

『自意識の昭和文学—現象としての「私」』（至文堂、1994 年）

『太宰治 弱さを演じるということ』（ちくま新書、2002 年）

『日本の小説 101』（新書館、2003 年）＊編著

『近代小説の表現機構』（岩波書店、2012 年）

『日本近代小説史』（中央公論社、2015 年）

『「私」をつくる 近代小説の試み』（岩波新書、2015 年）